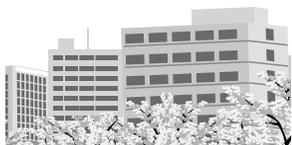


会員の広場



俳句と「ああそうですか」

廣中聰（東京）

趣味の一つで長く続けているのが、「俳句」です。友人たちに聞くと、近づきたいそうです。季語は絶対、575の17音の定型、切れが必要、文語と口語の混用は駄目などなど決まりが多く、敷居が高いとのこと。ところが、発祥からすると、上流階級の和歌から庶

民に下りてきた大衆文芸が俳句です。

私の俳句修行の始まりは、勤務先の先輩の俳句部への懲溲です。魅力は、かの陸奥宗光が「蹇蹇録」を執筆した「大磯荘」での1年に一度の句会でした。以来約40年です。

まず初期の記憶に残った佳句の一部を紹介します。芭蕉、子規、虚子作は省略します。

虚子の高弟、甲州在の飯田蛇笏の二作品。

「芋の露連山影を正しうす」

「をりとりてはらりとおもきすすきかな」

土着性と作風の格調の高さ、正しさが魅力でした。その子息で、飯田龍太は、母校誠之館出身の作家井伏鱒二と無二の釣りの友でした。

「生き生きと三月生る雲の奥」

「一月の川一月の谷の中」

「龍の玉升さんと呼ぶ虚子の声」

移り行く甲斐の山河に根差した詩魂を強く感じます。なお「升さん」とは子規のことです。細見綾子は、結婚するも夫病死、両親も失い、12歳年少の沢木欣一（戦後結婚、社会性俳句を主唱）を戦場に見送ります。

日常の景が卓越した独特の表現力で示されます。

「そら豆はまことに青き味したり」

「鶏頭を三尺離れもの思ふ」

詩とは対極の政治の世界にも俳人はいます。政治家、中曾根康弘です。

「暮れてなお命の限り蟬時雨」

「つつましく老ゆる心に梅の花」（結婚62年目）

「鯉一念沈みたるまま動かざる」

心情が素直に表され、共感できます。

「ああそうですか」とは、若手俳人でNHK番組の選者を務める堀田季何の一言。多くの一般の人の作品を見るに、見たまま、感じたままを陳腐な表現で連ねているだけで、そこには感興がないということです。リズムはよくも、言葉をおいただけという自作の欠点をついてくれました。句会では低空飛行が常態で、「句会とは苦会のことと見つけたり」が続いています。

実体験ですが、句会での私の高得点句は、投稿する俳句雑誌のプロの俳人を選ばれないのです。一般俳人の共感度を越えるものが句質向上のキーと思われれます。

最後に、近時の星野高士（虚子の曾孫）推薦句を紹介させていただきます。

「スコールの押し広げたる河口かな」